編水滸畫傳

初編

十

へ81
875
10

特
門 175
巻 10

神書佛書繪本新書 [illegible]
幸運堂[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

新編水滸畫傳卷之十

東都　曲亭主人編譯

明治三年十月十日

○林冲が棒洪教頭を打

柴進ハふたゝび酒食を安排して林冲ホを管待ㇾ。莊客来りて教師来臨ㇾまゐりて報知せㇾハ。ことゝ[illegible]清来ㇾまゐらせやく一張の卓を擡来よりて命ずる。莊客ハところを得て退出ㇾぶやゝて件の教師入来れり。その時林冲ハ身を起ㇾてその人を見つめやる。今莊客ハ彼を稱して教師といへるゆへに大官人の師父なるゆゑ公つさ。急ぎ身を躬揖て叅ずれども。彼人ハ見えずもせず。いとゝ[illegible]れて林冲ハ[illegible]頭をも擡ず。柴進ハ教師ふ對ひ。林冲を指著ㇾいふ。洪教頭これなるハ東京八十萬禁軍。鎗棒の教頭林武師林冲とぞおもふとなれ。對面あり

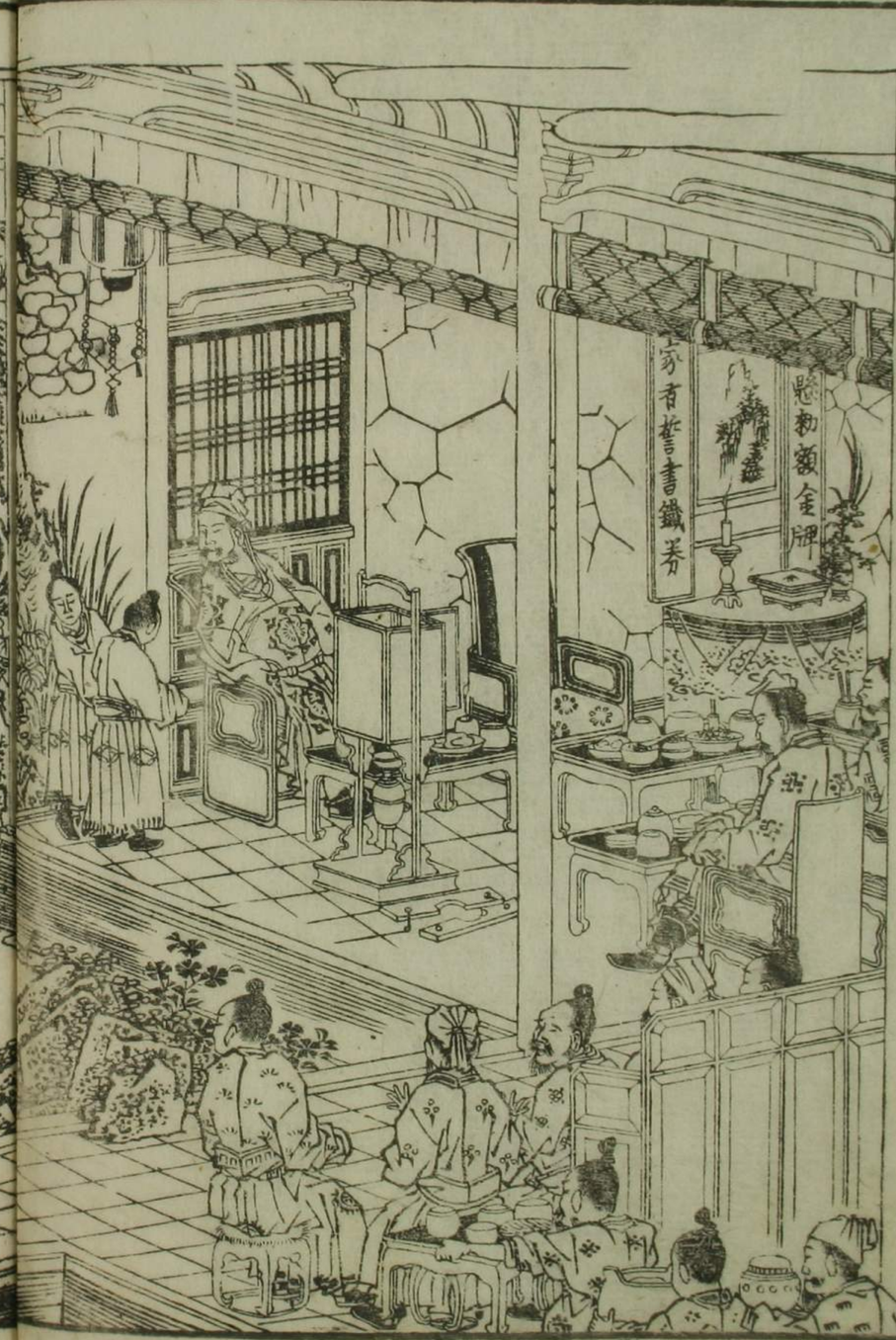
ゐ〜といひ〜ゑ。林冲ハ又こゝに彼洪教頭を牢〜ゝ。されど洪教頭ハいよ〜高
ぶり〜。れをも答さゞれば。柴進こゝ酒よ喜ぶ。林冲ハみゑを引さりて。ゐ坐を洪
教頭ふ濃ぶ。洪教頭ハこれをさく辞退せず。上首よ坐ゐ〜ゐ〜。
傍若無人ゐり〜極よ。柴進ハ林冲ハゐゐ〜ゐ〜ゐこゝ。林冲ハゐゐゐこの肩下ふ
坐〜。董起薛霸も亦ちの〜坐をトれば。洪教頭ハ肘を張顕を反〜。ゐとり
ゐ打ゑ。柴進よ對〜いゐ。大官人いゐれば礼儀を厚し〜ゐ〜ゐ配
軍を管待ゐ〜ゐ〜と問ハば。柴進答〜。この人ハ尋常の流配人よ比ゐ〜ゐ。ゐれハ
とれ八十萬禁軍教頭なゐを。なゐど。ゐ〜〜〜慢りゐ〜ゐ〜といふ洪教頭冷々
笑〜。大官人ハ只錦棒を習ふ〜ゐ好ゐ。ゐ〜ゐ。ゐゐゐゐの配軍常よ来り
く。倚草附木。ゐゐれハ錦棒の教頭ゐり〜て些の酒食米銭を誘〜
のゐ。ゐ〜ゐ〜ゐ〜も真の教頭ゐ〜ハおぼゐ〜ゐ〜ゐ〜と嘲ゐゐ。林冲ハとれ

をゆゐ〜ゐも声をもせて。ゐを低〜〜居〜り。ゐよ柴進袖うゐあゐゐ。
人を相ゐゐゐハいと難〜。これハ他人の顧ひゐゐ〜ゐ〜ゐと洪教ゐハ
今柴進ゐ彼を信じ。ゐのれを否ゐるのゐまゐあゐをゐ〜〜私よ怒ゐ忽地ゐを
跳起〜ていゐ。ゐれいゐ彼を信ゐゐ彼ゐ〜ゐれと較量せば真の教頭ゐ
せんいゐ一棒を使んゐと叫ゐゐよ林冲ハゐ〜ゐの問答ゐも及ゐ。洪教頭ゐゐこの光
糸をゐ〜。原来彼ゐの我を怕ゐ〜ゐゐゐこゐ。ゐゐ打〜ゐ〜て酒肉ゐを使ゐ〜ゐ
尋思〜。只顧俯仰〜て止ゐゐ。柴進ハ林冲ゐ本ゐをゐ〜ゐ〜ゐひ。又二ゐゐハ
林冲を彼よ贏せ〜。その嘴ゐ減んとゐひゐゐ盃を把〜五七盃を傾ゐゐ〜
も。月ハ庭前の木の間を漏〜。影ハ廳堂の裏面を照〜。さゐ〜ゐ白昼よ異ゐ
ゐ〜ゐ〜柴進ハ林冲ゐ對ひ教頭ゐ〜ゐ〜ゐこの処ゐ〜較量ゐゐ〜といゐ林冲
これをゐ〜。肚裏ゐ〜尋思ゐゐ。この洪教頭ハゐゐ〜ゐ柴大官人の師又

あんをこれ立地より打翻さび却〳〵奥つを先へべ。とせん〳〵せんと躊躇〳〵
柴進快〳〵これを精し。林教頭ふた〳〵推辞のひそこの洪教頭ハこゝよ到り〳〵
〳〵時〳〵ふとこの間ヨ又對手なりうさ小可只顧二位の武藝をつま〳〵ハ〳〵といよ
か〳〵いざれば柴進ハ面皮ヨ着〳〵。林沖ハ十分の本事を使ひ出ハとゝ〳〵ばなり
林沖ハこの就裏をよく〳〵ひつふ心を放し。口いつくれハ洪教頭ハあちこゝよ席を立
〳〵。まれ〳〵とまりつ。堂後ハ空地の上ヨ走り出ハ。莊客一束の棹棒を
来り〳〵そのほとりふ放す。洪教頭ハ裙子を高〳〵拖折〳〵。彼棒をえ〳〵
把り。電光のごゝ閃して旗鼓とひふを使ひ出し。まれ〳〵と叫びりされど
林沖ハさらざる事ハもゝ。大宦人ふあふ笑ふ〳〵會釈し。中庭を立
〳〵棒を執さ〳〵教ふとひふヨ洪教頭ハそや一口ヨ呑も来つべき光景ふを
林沖ハ莞尓として山東大擂とひふを使ひ出せ〳〵。正ヨ巨蟒の洞より出て

樹を抜藤を捲ふ異ふ〳〵。既ヨ両箇の教頭ハ月を燭とし〳〵てふを交へ
繞〳〵ヨ四合五合ヨ及ぶ〳〵さ。林沖ハ圏子れ外へ跳り出。少〳〵歇こふ人と叫べ。
柴進いと怪〳〵。林武師ふ〳〵そ〳〵ふ祖ヨ棒をば使ひふ〳〵ふ同ハ林沖答
〳〵小人そや輸〳〵ひ〳〵ふ柴進〳〵ち笑〳〵。いまゞ勝負をとりふの間ヨ。なぜや
か〳〵ふようさそのをゆへそふ。いと本事なり〳〵こそとひふハ林沖又いふ〳〵。わふハ身
ふ枷を帶〳〵れば。進退も自在ふ〳〵ふ。こゝをり〳〵輸さりとハ中ふ〳〵ふ。いつ
いひもそふ〳〵ふ柴進呵〳〵〳〵打笑ひ。これふまゞ〳〵忘れ〳〵。さもこそとて
莊客をばひ十両の銀子をとり来り〳〵せ〳〵。これを董起薛霸ヨ与へ小可太膳
二位を煩せいなり。權〳〵林教頭の枷を開さふ〳〵や。明日牢城ふ〳〵此のふあ
ちらべ。それ〳〵ようふ〳〵中ふ〳〵〳〵べ〳〵ふ。両箇の公人ハこの銀子を見〳〵一緡ふ
ようびでゆゞて林沖ふ護身枷を開〳〵祖ヨ柴進ヨよろこび〳〵。再び莊客ふ一

柴進が廳前ゝ林冲洪教頭と較量せ



錠の銀重二十五両あまりをとり来たらせ。林沖と洪教頭に指示していふ。両箇の教頭いづれもあれ贏ちし一人に利物とまぐ。とり〳〵較量のくといふこれ林沖がるはらふ〳〵本事現使ひ出さんと陪こ。故意とこの銀子を利物として。勵ませくらべ。こゝにあり。さて洪教頭は林沖が武藝。偉りなるを見てよ。今ここの鞦の銀子をとり〳〵。彼はもとせ〳〵ふを畫〳〵。ふたゝび旗鼓をもを使ひ火を把天を燒の勢ひをなす。只顧打翻さんとかまへり。林沖は柴進が心の裏をまぐ〳〵曉り。今はうく〳〵ひ〳〵ぶ件の棒を横〳〵出草を撥蛇を尋るの勢をなせば洪教頭一声吼り〳〵。来れ〳〵といひもあへぐ。猛〳〵前こゝ打入とするを林沖中一退げば洪教頭直に赴入るの一歩。棒を提起く蒐直に向ひまゝ〳〵き。林沖は彼が脚の乱〳〵を足定め。棒を振りて跳り〳〵まは洪教頭をふたぐひ〳〵。これを拄〳〵皇逃〳〵。脱生遯んとするところを。林沖快〳〵その瞞見を

下〳〵〳〵忽地撞と打翻せば。人こゝ一脊に吐と笑ふ。柴進は林沖が輙く贏るをこゝ大よろこび。志ば〳〵唱采く止ざるふそ洪教頭は満面ほゝ〳〵火の如し那里〳〵もなく逃去る。さる程に柴進は林沖がを推〳〵後堂に入る。更に酒を添利物を送る。これより毎日に管待〳〵。既に五七日住〳〵。両箇の公人は只顧促催〳〵行んるを討るあぞ。柴進は封の書を写めこゝ林沖に遍〳〵封の書を写めこゝ林沖に遍〳〵

いこう。滄州の大尹は柴進と疎うとて。又牢城の管営。差撥（管営は牢城の役人。職役の名目なり。此二人姓氏を闕かるゝ。只管営〳〵と稱するのみ。差撥は管営の下）も交り厚く〳〵この書をもて〳〵いさゝかあり。

さ看覩ますもとゝ〳〵。説示〳〵。又二十五両の銀子をとり〳〵林沖に与へ別に五両の銀子を両箇の公人にとらせ。夜もゝ〳〵酒を要あ〳〵。つ次の日天明に早飯をすの〳〵。荘客あまた箇の行李を挑りて出せば。林沖は舊の〳〵枷を帯。柴進に辞別〳〵立出る〳〵。柴進は荘門の外まで送り出さ〳〵。林沖をはび

住やゝいまゝ。教頭日あゝぞゝてゝれ冬の衣服を送り遣さべ。ゝ物ゝを
さゝるもあゝべ。ゝくまゝくゝとゝくゝ林冲ふゝ感激。ゝの日ゝ此恩
ゝ答ゝらん寔ゝ一生の萬幸ゝとゝゝ其時董超薛霸もこの流の笞を待を
ゝゝこゝ待ゝ遂ゝ二箇の人ゝ滄州を投ゝいそぎゝ。巳牌時候滄州の城中
ゝ到ゝ。この地ゝさゝゝなる去処なゝとゝゝ。亦六街三市ありさて三人ゝ街の
裏ゝ到りゝ公文をさゝ出ゝまれゝ當廳林冲を引ゝ列官ゝ禀ゝさゝ
べ。文尹ゝ林冲を收ゝらせゝ牢城ゝ罪ある人を送ゝ。やゝて回文を高
箇の公人ゝ遍ゝせゝ。董超薛霸ゝ別を告ゝ東京へゝゝる話この下
ゝゝ。ゝゝ林冲ゝ牢城の營内ゝ入ゝ高ゝ墻壯地濶ゝ池深ゝ
天王堂の畔ゝ。両行の垂柳緑ゝ烟のごゝ點視廳の前ゝ一簇ゝ喬
松青ゝゝ。黥を撥ゝ往来的人ゝさゝゝこれ釘を咬ゝ鐵ゝ嚼ゝ龍を降し

虎を縛好漢のこゝを。ゝれゝ林冲ゝ牢城へ引ゝゝ。草身房の裏ゝあり
ゝ。點視の爲ゝ伺候ゝゝ一般的ゝ罪人ゝもこれを看覷ゝ林冲ゝ耳語
ゝ。この牢城の管營差撥ゝ利をゝゝ人を害ゝゝ。些の人情な
ゝ。ゝゝ汝を土牢へつゝ。生死両ゝ得ゝ。ゝの苦痛を受ゝ。又彼人情を
ゝゝ。ゝゝ一百の殺威棒を饒ゝゝ。ゝゝ病ゝあるを。ゝ權ゝ寄下
ゝゝゝ告ゝ。ゝれゝも人情ゝゝれゝ。この棒を脱ゝゝゝ語ゝ
林冲ゝゝ。ゝゝ今ゝ指教ゝゝゝゝ人ゝゝれゝゝ五両の銀子を管營ゝ送
ゝ。又五両の銀子を差撥ゝ与ゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ折ゝゝ。ゝれゝ差撥ゝ
ゝ。この新来の配軍林冲ゝゝ汝ゝゝ。ゝゝ林冲答ゝ。小人ゝゝゝ差撥ゝ彼
ゝ錢を出ゝゝゝゝ面皮を変ゝ。汝この賊配軍。ゝれをゝゝゝゝ洋
伏いゝゝゝ。這厮東京ゝゝ。ゝゝ流配ゝゝゝ大刺ゝ的

なんとするぞ。つゝ〳〵這厮が臉をこゝるまでに。餓鬼の相貌あれば手を延命終るまゝ〳〵發跡とゝえてみ。打ども死るぞ。搭くも殺ざるいと頑囚ぞや。汝賊骨頭あれば。好も歹もまぐこれ。ぐまの裏よあるのを骨を粉身を碎きくもその切驗をつくべし。いさすさあゝ〳〵罵まば。林沖ハ只顧罵られて。一佛出世すでもひを撞ぞ。口を鉗て居うしば衆の罪犯人へこの光京よ害怕れ。ゝみ散〳〵ふ出行る。林沖ハ傷ふ人の紀をつゝ。五両の銀子をゝり出し。差撥哥ゝ軽小ふ〳〵ゝ。收めの〳〵といしもあ〳〵そのの懐よさ一入ハ。差撥ひそふ探りつゝ。これ〳〵ふ手と管營よ送ふやといふいる管營哥ゝみハ別よ五両の銀子を送るべうおりふあれば。これ進ふせくゝじのへといひつ。又五両の銀子を遍ゝるふぞ。差撥忽地臉を軟所ゝとゝち笑ゝ。林教頭ゝれ〳〵ゝ芳しき名をゆつるぶ端的好男子ぞし

もりあよ高太尉の爲よ陷られゝ。暫時苦を受ゝいべゝ。久後あゝ〳〵立身あゝべ。孫よこの表人物等閑の人よあゝぞゆといへば林沖もゝち笑て。よゝの差撥の照顧を仰なるなりとゝ托ゝゆえ柴進が書翰をとり出しゝ。これつゝ〳〵もりゝとゝふ。差撥ハ両封の書簡をまよとりゝ。柴大官人今〳〵書札を送りあゝて。是一錠の金子を得ゝふおるぞれば。ゝのの煩悩あゝべきこの一封をハゝれ管營よ下ゝべ。管營ゝゝ〳〵沙を點一百の殺威棒を打んとゝるとゝ。只病あり〳〵いまゝ痊ぞといへゝ。又沙ゝ與よ吾ゝ〳〵ゝとゝ。林沖ふゝ〳〵ゝこれを謝ゝば。差撥ハ彼銀子と書札よを含ゝ〳〵。早身房を退出ゝ。林沖只管嘆息一錢あれば木佛も面をゝとゝふ常言もゝる时ふそあり。ゝゝ〳〵居ゝゝ。さて差撥ハ銀子と書札とを管營よ遍ゝ。備よ林沖が

林冲牢城殺威棒を脱る

大坂備

るを拘ゑ。この漢子既に柴大官人よりも書を送りて托こゆえあるを
こそ元より高大尉の爲に陷害られて。配一未ときいへども。さ世る
罪犯あるあらざるを。首尾を舒べて。管營ゆゑ。か主に彼を看顧
ひさせそへあべきもの。林冲を呼びいて差撥にやがて草房
の裏に到りて。林冲を將て來れり時に管營林冲に對ひ。てみまわる
犯人林冲よくうけあらん。太祖武德皇帝定おさまるところの舊制あり。
新に入り來る配軍をまづ打てその數一百あり。これを殺威棒といふ。
誰かある彼を駄起して來よと叫べば林冲が生ぜて。小人路をぐ風寒に
感冒されいまだ痊可いまだ寄下まるせなんこのあうけ引
あるれかしといふ。差撥も又いふ。この人實に今病あり。管營もぐ
饒しあへといふ。管營ゆゑ。この人果して症候あるべ權み且く寄下

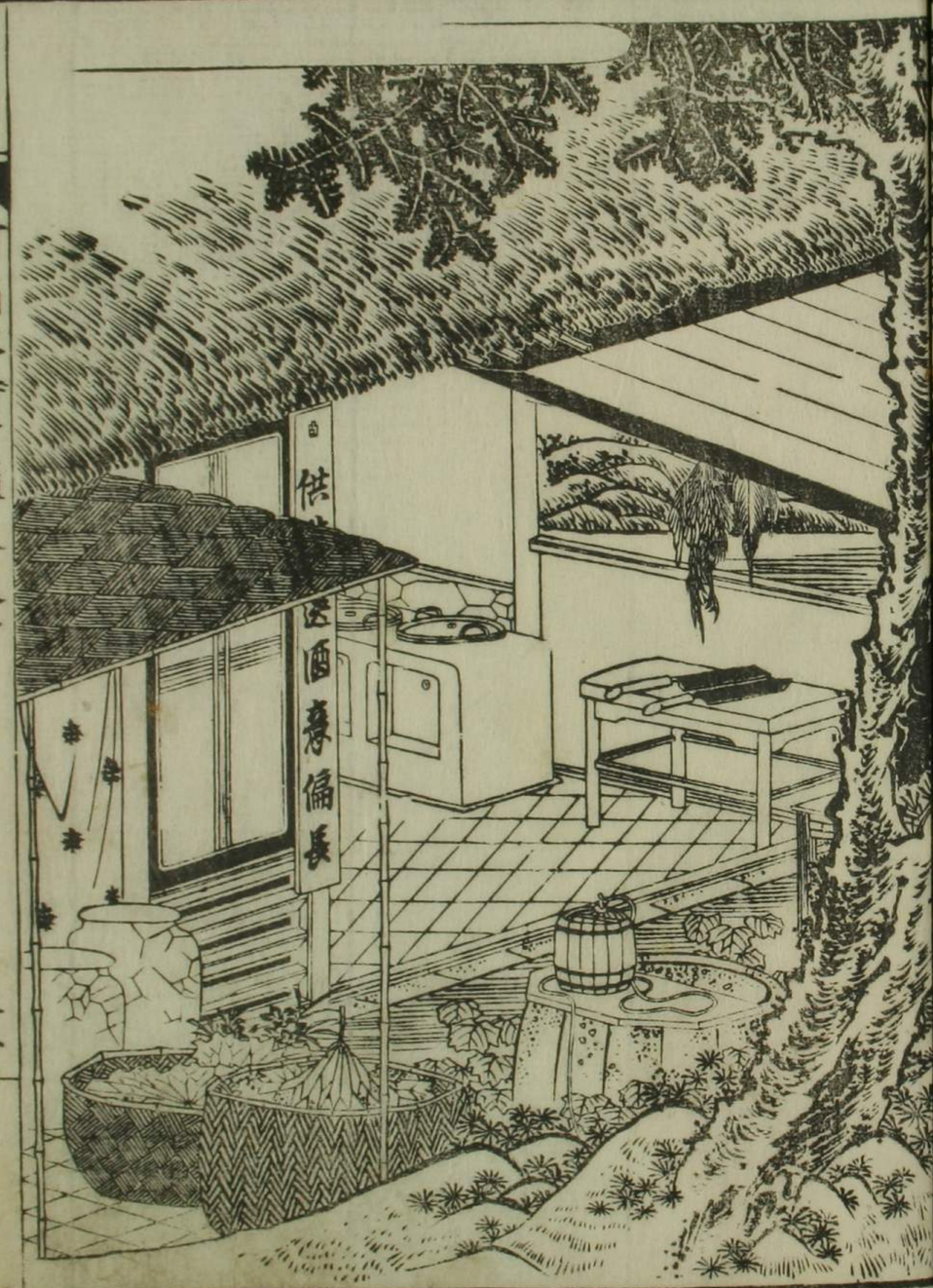
おさ病疫をまちて。打んも遅ふじと應じ。差撥又いふ。見に今天
王堂の看守的既に年限滿れば。この林冲を差して。それを換せのひな
ん帖文をあらりゆくとゆえおさ。林冲を單身房の裏に到り。行李すべど
ひ拾させ。教頭これ十分に汝を周全。天王堂を看守るべ
し。この堂に營中第一の好処ぞ。看氣力的勾當なり。只早晩香を燒
地を掃のみ。汝に別の囚徒に早より晩に到ずまた足いまるれども
ゆ饒さで。選人情をさるのに土牢に入れおきて活ところこの苦を受さす
ふてといへば林冲も厚謝して。ふたひ二三兩の銀子をおくりて
の恩惠あへこの頂上拙を開了まるべいよ感悅いまどといふ。差撥點
頭して。まづ銀子を接て連忙して走りゆき。管營にそのゆを告ぐて枷
を開去て。林冲にこれより天王堂の内にありて毎日香を燒掃除をを

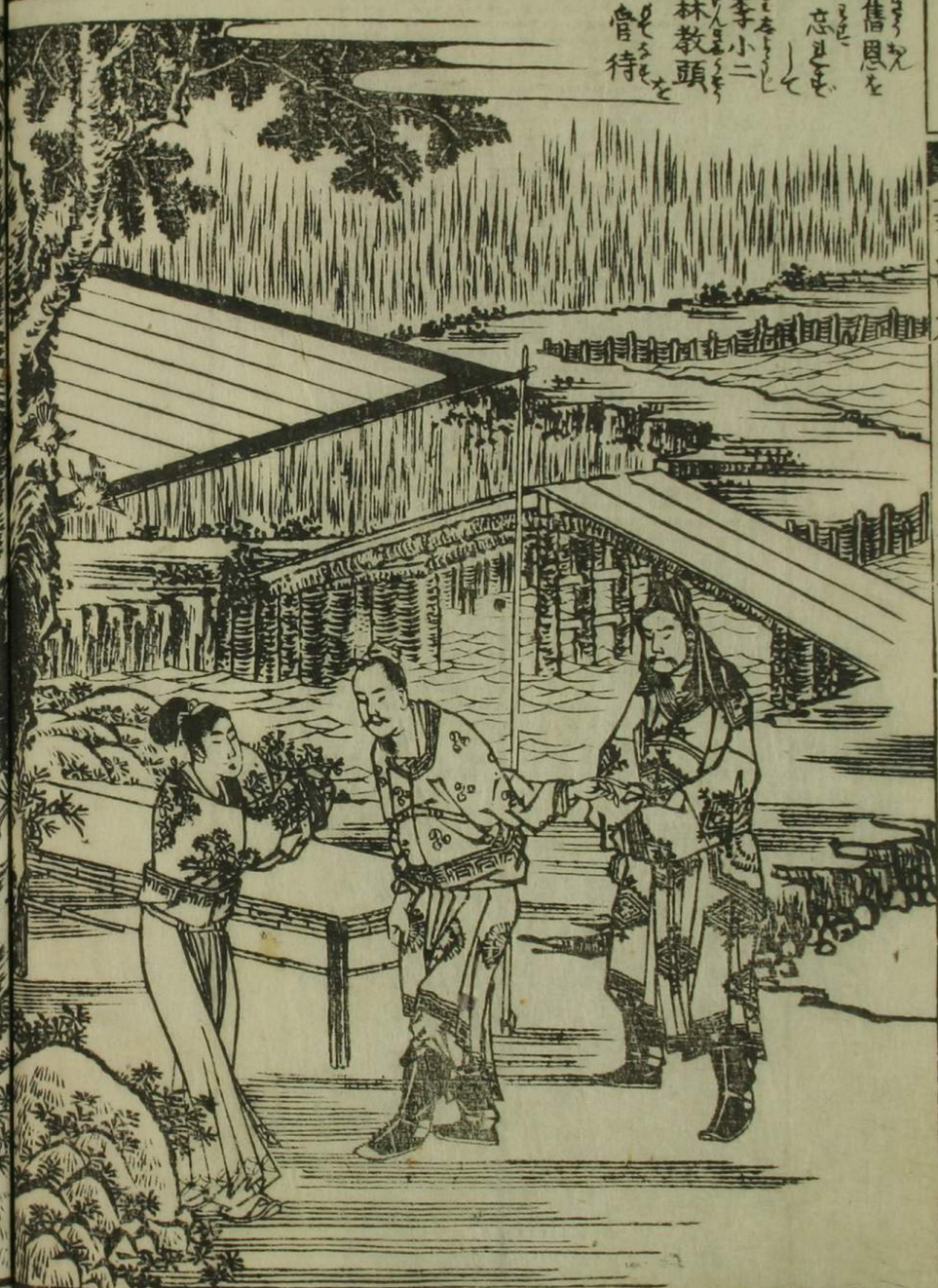
勾當とて。ほえぎ光陰を申くるゝ。四五十日を送りて。管營差撥へ賄賂をなすてより。彼が自在まうるせて。亦敢て拘管せず。柴進も人を差て。冬の衣服を送りて。てをりくもぐくの囚徒も林冲を救済て。腹を食の満ざる日もなく。こゝみ喜ぶの限なし。かゝる冬も半るころ。一日林冲も已牌時分。こゝ〜〜營前を間走して。將を行んとする折しも。忽地背後を人あり。林教頭。なぜそこ這里へは在もぞやとぼうけり

○林教頭風雪山神廟

當時林冲は頭を回して。これを見るに豫て認る酒生児李小二とかふりのし。彼當初東京にあり。村を出て林冲が看顧を受て。恩のこゝろ此李小二。主人の家財を盗み出して。こゝに淫樂の爲に用盡るゝ。發覺て官司に送り。既に罪を問されんとせるを林冲さまゝ陪話して彼を救ひ出

の錢物を主人に還して。沙汰せり。これより〜〜李小二は官司に送られるを免れ。京師の住ひをなして。林冲又彼に盤纏を贈て。發せるゝ。想ずも今日この処にて撞見ぬ。さて林冲は李小二に對ひ。汝いま〜〜這里へは在ぞと問。李小二拜伏して。東京をも出て。ゆく〜こゝまで走りめぐり。この滄州に到りて。こゝに一箇の酒店を姓は王氏なる人あり。小人を住め過賣の助をなせ。小人も又勤謹にして好菜蔬を安排して。汁水を調和いたせしより。年〜喫の人まで〜唱采ぞといふこと。こゝをもて買賣の順當して。主人ふうくよろこび。只一箇の女児に小人を招て女婿といたせしを。丈人丈母は前年亦まうりひさ。まるうち小人夫妻の酒店へこの營前にあり。今討錢やとて立出して。そこ〜〜にも恩人見


供酒尊偏長


舊恩を忘れず
李小二林教頭を會待

えさせられしさよ。恩人は又何ゆゑこの里に来りあひしぞと。林冲は
はるゝこゝろ臉上を指著して。それ高太尉に悪まれようゝ刺されてこの州
へ配され。今天王堂を管りて。彼首にあり。首をひくべきなり。尾をとゝ
さい箇様ゝゝとまくべく。備細に説をれば。李小二且驚き且哀ゝゝ
て家に誘引て。上坐に請じつ。妻を呼て對面せ。両口児洋伏して
いとりるは。こゝ夫妻はとえゝ親眷もなりつるに今日ひもけを恩
人に到てもふるれば。おのづゝ公つよゝことといひく。塵に入れて管
待べ林冲只管辞退しつ。それは罪ある囚なりふく。睦ミ相語ひ。此夫
妻を玉辱ひべといふ。李小二もあくまでいうてさるやうべき恩人の高
名は。とくゝ聞るものもあり。倘衣服の汚き破れるものは。こゝ家に今
来りて漿洗縫補ゝ進ずせんとれんごろに。いとねんごろに。林冲もあり

くよろこび来りしとのものくりまるに。林冲は別を
告て天王堂へ入りる。その次の日。李小二妻ゆく暁ゆくあそこ。林冲を
の憂を慰しゝ。足より毎日に湯を送り水を送り訪ひ慰れば林冲も其
信ゝしさを入ゝ。わく些の銀子を与へ本銭にさせ。李小二が妻
は林冲が衣服を縫補ひ。等閑にあらず待しぬ。間話休題。一日李小二は門
前にあり。菜蔬下飯を安排しつ。只これは一箇の人刃と店の裏に跳
入りゝ。発九に尻をうちゝ。又一人走り来ゝ。そのくつるゆしぬ。先
に来りし人は軍官にゝ。後に来りし人は牢の模様あり。李小二
これ以ゝ。すべて裏面に走り入り。酒肴まかりもべりやと問ふに。
彼人まづ一両の銀子をとり出。これを李小二に与へいふやう。好酒二四
瓶と菓品酒饌など。浄らかにゝ将来れ。今ゝ人請て客あれば。

ぞ多さ少なを問ぞ。只管より〳〵出よといふ。李小二申す。そいづれも客をう招きまつと問。彼人答〳〵。これ今管營差撥の二人を請て。そのうちらよべくおりあり。汝ゑが爲ま彼人をぼび来りゆの人ぞと問ば。只一箇の官人些商議まべきさるのあり〳〵て。等〳〵いと答よと。いへば李小二いふ。牢城の裏ゑ到り〳〵。彼二人を請来れり。もれども管營差撥ハ其人を認らぞ。まづよれゑ講て〳〵。さて名字を問ば。彼官人のいつまでも出こゝまあり。少刻せば去よせやさん。まづ酒をもち〳〵。来よとぼび〳〵。李小二連忙〳〵酒肉取り〳〵出る。処せさまぐ〳〵おさるべうその時彼官人。副勸盃常の盃の外。大盃。これを覩やと譯を討。互ゑ讓あひ〳〵。四人ゆうもゑ数盃を傾ゆ。李小二ハ桜を攬ぐ〳〵伏侍〳〵更よつよなりうれば跟より来れる人。ぶうゆ湯桶を討〳〵酒を溫ゆるべきまゆ

彼官人李小二をぼびくいへり。これを伴あれば酒を溫さるべ。とゆさよりぼさへ汝且く来ることるれといふ。李小二ハともかくゆ〳〵應〳〵門首ゑ来り。老婆をぼび〳〵私語ゆゑ。彼二箇の人ゑ不應諾なれ。大姐さハおぼさぶやといふ。老婆ゆ〳〵。此ゑ何のをゆ〳〵不應諾なれ〳〵宜べぞといふ。李小二又いへり。彼二人ゑ言語をゆへ東京の人なり。そゑ初め又管營差撥を認らぞ。向後ゑれ酒を將ゆさ〳〵退く時。差撥ゑ口より高太尉の一句を納出〳〵。これをゆ〳〵おりあり。林教頭の子ゑ人ゑ。些の干礙あるべもそゑれぞ。それハ門前ゑあり〳〵理會ゆべ。此ゑハ閤児の背後ゑ。甚麼ゆ〳〵紙ゆ説ゆらん。よく〳〵ゆてよといふ。老婆ハ志ぞ一尋思〳〵。志ゑ天王堂ゑ。林教頭をゆさ。直ゑその人をゑせゆ。疑念ゆゑよもれるんといへば。小二改を掉て。

陸謙はじめ董超薛霸を酒店に招き密談す今又李小二が店のうへに到るところもいさゝか前文に借ぶまこれらの作者の筆力なれるところ奇にして妙なり

いかゞ。林教頭は性急の人なるに。倘こゝに来りて人をゝんに。彼が前日物がたりのいつる。陸虞候の役をゝへを空くして罷るんや。忽地に人を殺し火を放ちて夫婦をも連累せんなん。只管まこと聽一聽

なるべ。理會もあるんといふ。老婆もうべなりとうけ引く。其処に到り。彼四人は只顧ひを交耳をゝくるに一時ばかりあるく出来り。接拭ぐる声低く。楚とゝこさゝ。只彼軍官の摸様の人懐のうちより一ッの帕子をとり出し。管營と差撥に遍与せゝ。差撥いとゝれしげる氣色あり。好も又も彼が性命に結果さうさんといひをゝめ待りしも。閣児の裏に湯を

ゝ来ると嘲るあぞ。李小二は裏面に入りて。酒を温め湯をうりて。管營に一封の書簡をうちゝるゝ。急に袖の裏へ隠しまり。

かゝ四箇の人ふゝひ四五盃の酒を喫く。酒銭を算選し。管營差撥立ちて。引つゞき彼二人も立出れしを頭を低し。身を轉背に走り去りぬ。居処に林冲入りまりて。小二哥打つゞきく好買賣やといふ。李小二又ゝ忙しく出ひて。恩人まゞ裏面に入りく冲に。些の説話あるといふまぞ。林冲怪しくその為を問。李小二声を低し。あるゝるゞもくり出。彼官人が差撥に遍しる帕子に金子を裹るゝおぼし。ちうも差撥が高太尉の三字を納出しゝ。彼是不審ゝそ。一五一十を告しに。林冲ゝく彼二人が生得は甚麽なる摸様なりしと問へば。李小二答く彼官人は身材短く五尺に足ずして面皮白浄に髭鬚はなし。約二十餘歳とおぼし。又跟より来りし人も長大にらぐく紫棠面色なりしに。林冲大に驚きて。その三十歳餘りなるは

一會の酒
四兄
幹を
見抑藏鴨鵝語方聞

李小二夏実に義兎依ヲ林伸ラ鑾良庶ス

陸虞候なり。この潑賊又こゝあるこれを害せんとこれ這厮が骨肉を泥まるまでおくべきこゝろ。歯を切り〳〵罵るべ小二これを勸〳〵
ゆ。恩人只彼を隄防まるまこそ便了め。古の人の言ふも飯は喫へ喧
んるを防路を走れば跌んるを防ぐといひ伴へやよ〳〵こゝ定め
なさぶめまへ〳〵いふをばうけ。林冲は搶と走り去り怒氣胸に充せり
く止ざれば。まづ街上をく一把の解腕尖刀と一條の花錦を買前街後
巷一地里を尋めぐれども。李小二夫妻はこの光景をこゝまふ
汗を揑著でうし林冲は次の日朝まづ記より滄州の城内城外小街夾
巷團〳〵と尋つ。その名こゝ李小二が家に立ちうつ。ものは狀をこゝみ
ざり〳〵といへば小二がいふ恩人願くはるをあるやうに〳〵。こゝ〳〵誤さ
まふあといふ林冲点頭こゝこの日も空〳〵天王堂にくり。さぐ〳〵三五日尋

ありけ。こゝ〳〵消耗もあり〳〵〳〵初ふ。やや〳〵心慢〳〵。第六日めに到り
こゝ〳〵管營差撥は林冲を点視の廳にいるを。汝こゝに来り〳〵
〳〵。許多の時日をこゝ〳〵れば。柴大官人の面皮に看く。擡舉へこゝに
なり。こゝより東門の外十五里に當り〳〵。大軍草料場あり。毎月但草料
を納め。些の常例錢を取見れのこゝを勾當こゝ原は一箇の老軍が看
管こゝあれと。汝を擡舉こゝ。彼に習らせ。老軍をば天王堂へ差さるし。
汝さやく彼処に到り〳〵。幾貫の盤纏を圍よう。いく〳〵紀ふは差撥を
鄉導こゝらべこゝこゝこゝいふ林冲は命こゝけこゝりぬと應こゝ。牢城を退
こゝ。李小二が家にゆこゝ。如此こゝのこゝを物ごこゝり。このこゝいふにこゝ
いこゝと問李小二はこゝ。この差使は又天王堂よりも好。那里にこゝ草料
を收こゝこゝ。些の常例錢鈔あり。常に錢を使ひこゝ賄賂せざれば。この

差使を勾くひと説示する。林冲眉を顰め彼が却て我を害せんこと。
ようさ差使を授しに。是いうるとて汚なくん。と疑惑へば李小二又いふ。
恩人只疑ひを休て赴き給へ。今より家遠く離れて毎日見えの
ことを憂れのみ。さんどいく迷もあるに夫をもべ。はやく坊ひゃあ
るーといひつ。やがて酒肉を安排し。林冲を待て暫時の別ををしむ
べ。林冲もこころよく喫了て。ふたゝび牢城に到りて。林冲はまづ天
王堂に立入て。包裹を脊負ひ。尖刀を帶花鎗を合て。差撥
とともに草料場に赴き。正月廿五日の天氣なれば。彤雲密に布
く。紛々揚こと一天の大雪を捲下し。須臾に野路を分ざる
頃刻に山は根を埋て。銀の世界玉の乾坤。こゝ萬物こゝ皓し。
さて林冲は差撥とともに路を踏て酒を喫て寒を防ぎ。彼草
料場の外面に来て。それは周遭は黄土牆にて。両扇の大門あり。推
開き裏面に入て。七八間の草房を倉殿に做て。四下はまべて
馬草を堆き。中間に両座の草廳あり。這里に入て。見れば一箇の老
軍火に向て居りて。その付差撥は彼老軍に對ひ。管營今この林冲
を差て。汝に聲とるなれば。汝は天王堂へ到て看管し。
といそがしくて。老軍は直ぐ鑰匙を合て出て。林冲に引著ていふ。
倉殿の内まは官司の封記あり。この幾堆の草は一堆ごとに數月の
備細に説示し。又林冲を引て草廳に到り。おのれが行李を收
拾て。又いふ。火盆鍋子碗碟のさぐひ。べて借らべーといふ。
林冲は。これもかるまを。天王堂の裏にしばらくつきべば。
隨意食を去るくといかその付老軍は掛る一箇の大葫蘆を指著。

林冲を
差撥
草料場
到る

り酒を喫んとするに。こゝを出て。東の大路を二三里ゆけば市井あり。この葫蘆をもとめゆきて買まへ。これも置土産なりとて。と說てやり差撥らも牢城へぞ入る。さきに林冲。ひとり床上なりて。包裹より被即ちとり出し。又地爐の辺に炭塊の炭あるを入れ。些の火焔を尋ねこれを火盆の中に入れ吹起つ。面を仰てこの草屋をとゝのへ。四下こゝを崩れて骨のこを残し。風のまに〳〵吹動れ。今も倒れべき光景なり。彼のこちらおりゆきこの屋にて。いゝで一冬をこのゝ得ん。雪も霽れ。城中にゆき泥水匠を雇ひ。城中にゆきこの孫どもを後理をべし。とてうどもけれ火に打向ひ。いとゞ寒もいやまさりとなれば。いでや些の酒を沽りて来て。今宵の寒を凌んあはとて。包裹より些の銀子をとり出し。彼葫蘆を食

て錦等に結びつけ。火をよく蓋をし。笠子を戴。鑰匙を腰に。外面へ走り出。大門の扇を引立て。鎖扃固くし。彼老軍が教へ路をたゞ。積雪を踏まさ。朔風に背を。歩行信せ〳〵ゆく。いまだ二三町あるに。只これが路傍に一箇の古廟あり。林冲これを礼拜し。神明に信心を憐れ。久後を庇佑の人。ひとゝ諸末に紙銭。唐山の人。神仏を敬ふ。方寸の紙に穴をあけ。これを銭に見なし。或は金銀の箔を打つもあり。これは金銭銀銭のこゝろなり。又一切の紙にこれを焼なり。これを俗に焼紙とも。こゝは天地神明に衣服金銀を焼の意。を焼べ〳〵念じつゝ。ゆくゆく少あり。果して一族の人家あり。ところに出て。林冲脚を住まくこゝる。離邑の中に草帚児を挑出せ。家あり。やゝ店の裏に到る。主人うちこゝに客人は那里より来ひつゝ。問へば林冲彼葫蘆を指示し。いまこれをば認らぬやとこゝに。主人点頭して。この葫蘆を

草料場の老軍のなり。いそぐ認ぐさといふ。林沖又いはく。今日より
この葫蘆ハ主が物なり。とのもちをりく来りく酒を沽るさぞといふ。主
人微笑ゐ。ちらぶく草料場の大哥よこそ在あれ。さぐ〳〵憩ひ給へ。
天氣もいと寒けさふ。二盃を酌ゐ。權〳〵接風をうまうんといひけり。
やがて一盤の熟牛肉と。一壺の酒をりて出ゐ。林沖ふ喫せり。林沖ハこれを喫て別
ホ一葫蘆の酒と牛肉とを沽ひ。碎銀子をそり出ゐ主人よへ葫蘆をゞ舊
のゞ〳〵花錦の竿ゑ結びつけ。相擾といひけて。搶と好面へ走り去ゐ。雪そ
ナゐ〳〵をまこゐ。風又大ゑ吹起り〳〵。面をむ〳〵ゞゐもあゞざりゐ。

○陸虞候草料場を火燒

再說林沖ハ瑞雪を踏北風を迎ゐ。飛也似ゑ走りゐ。草料場ハ
門口ゑ到ゐ。鎖を開ゐ〳〵ゞ。裏面ゑ入り〳〵ゞ。忽地ゑいはゐ叫びゐり。原
是天理昭然と〳〵。善人義士を佑護ゐひ。この大雪ゑより〳〵。林沖が
性命を救ひゐん。両間の草廳雪ゑ壓れく倒ゑ〳〵あり。林沖ハさて
いかゑせゞとゐひ〳〵ゐ。錦と葫蘆〳〵を雪の中ゑ捨もそて。さぐ火
盆の火ことを〳〵ゐん〳〵。とゐ〳〵して壁を搬開ゐ。半身を探り入り〳〵
ゐいさゞゐ。火ハ雪ゑうち滅ゐれ〳〵ゞ。中ゑ入ゐ〳〵。ゐ〳〵ゞ一條の紫被
を探り出ゐ〳〵。鑽出ゐ〳〵ゐれハ天色既ふ晚ゐ。いゐゐもせんゑゞゐ。前ゐ
牛里ゐ行ゐゐゐゑ古廟ありゐ〳〵ゐ。ゐゐ〳〵ゐ。今宵ハ那里ゑ一宿ゐ。明
ゐゐハ理會もありゐんと尋思ゐ。又門を拽ゑ〳〵舊のゞ〳〵ゐ鎖ゐ。
那廟のゐとりゑ走りつゐ。傍辺ゑ一堰の石頭ありをゑ〳〵掇將ゐら
ゐ過来り〳〵門ゑ靠ゐ。扇の風ゑあゐ〳〵ゞゐ〳〵ゐ〳〵ゐ。ゐゞ〳〵
裏面ゑ入り〳〵ゐ。殿内ゑハ塑著の一尊。金甲の山神を安置ゐ。左右

下ハ判官と小鬼とを立たりしが。只紙銭の堆おほく。鄰舎もなく廟主もなかりける程に合掌しつ。花鎗と葫蘆とを紙銭の上に放在き彼絮被を打ひろげてまとひ座を卜。笠子をとりて袖子の雪をうち拂ひ懐中の牛肉を下酒として。葫蘆の冷酒を喫んとする程に忽地外面に必く剝々地と爆響きこゆれバ。林冲怪しみて身を跳り起し壁の縫裏より外面をうかゞへバ。草料場の裏に火起りて。刮々雜々と燒著しぞ。大に驚きさて鎗を拿ばや火を救んとて走り出んとする折しも。前面より說話しつゝ來る人あれバ。林冲ハ廟の裏面に伏在てこれを窺ふに三箇ばかりの脚步響して廟のまへに走り來つゝ手をかけ門扇を推しけれど。前に林冲が大石を靠住ておきつるなれバ推ども推ども開かず。彼三人ハぜひなく廟の簷下に停立て。燒上る火を見て。一箇の漢子がほこりがほに。いかにこの計ハ施しおほせたるにあらずやといへバ一箇が應て。管營差撥兩位の心を用られたるなれバ京師へ立かへらん日高太尉に稟しまゐらせて二位を保して大官に做しまゐらせん。這番こそ彼張教頭も推に言語なかりけれといふ。又一箇がいふやう。我們かくしおほせしからハ高衙內の病も日ならずして痊可なるべし。彼人燒死しなバ其時ハ衙內を女壻としまゐらせん事何の礙かあるべきさ。畢竟張教頭がうけ引ざればとて衙內の病いよ〳〵重りし。太尉もいかの心を苦しめ給ふめ。這件の幹なるをつくさせてハこの女人いくたびか心を竭しつまずけり。兩位の手を借らずハ速に完備がたかりけんといふ其時又一箇がいふやう。小人まづ墻のもとよりまさに枯柴をすて折來て乾を火把として。ひとりで走り去べしといへバ。又一箇がいふ

陸謙
富安仍
雪を
廟門の
前に避

ゐる。早晩七八分も燒おちられば彼いづで逃るべき。縱燒死るぞとも大軍の草料場を燒られば。又死罪を脫ぐこと能はず。又一箇がいふ。とても死ぬよ一堀の骨頭を拾ひ。將又太尉と衙内よりこれせまわらせるべき。こそ喜びうべられとぞいひける。林冲はこの三箇が說話をきゝよ一箇は差撥。一箇は陸虞候陸謙一箇は富安あり〳〵べ。傾然と〳〵密ふよろこび。天林冲を憐見る。草廳を倒〳〵ゐるぞは彼おが爲ふ燒ころされべり〳〵をたちぶぞもこの〳〵。寃をむらゐよ。こふ〳〵感激〳〵いところ〳〵と石を把除花錦を挺つ廟の門をさろと冥さ。淫賊とも林冲を認ふりやとゐよ。二人ゐつよ走らんとせるよ紐るこさ呆〳〵動けず。林冲周りと跳りもすぐ一錦よ差撥を脫寮的と擲倒せば。陸虞候はよ卿を縮め命ぞうはは饒〳〵ぶこの隙よ彼富安は起つ顚つ逃

れるの。いまぐ十来步よ到ふぞ。林冲起つさ〳〵又一錦よ擲倒〳〵。刃を回〳〵走り来るこさ。陸謙は纔よ〳〵〳〵五步わるぞ。林冲一声大よ吼り。好賊那里へゐ〳〵ぞこ叫び。胷を批〳〵雪の上よ撲地と翻在脚をゐ〳〵そ此胸を踏〳〵ぶめ錦を捨〳〵腰ある刀を拔出〳〵。陸虞候が臉の上ふ圖着〳〵罵アるこの潑賊ゐれえより汝と甚の寃讎もゐりつるふいうなれば志ぞ〳〵ゐれを害せんとはゐうる。正よ是人を殺さば恕さべ。情理は容〳〵難といひすべば。陸謙はおそる〳〵。ゐそる小人が刃よ干るよあぐぞ。高太尉の差遣よりこ〳〵を知ぞり〳〵教ひねば〳〵。饒恕〳〵べくとは汝〳〵竹馬の声は枯野ふ虫の鳴よりも細〳〵林冲これをゐもあくぞゐれこ汝〳〵は友なりを。今日ゐれを害せんとゐるぞゐ。汝が刃ふ干ぞとせんすぞ。刀を喫へよと罵り。陸謙が衣服を扯開さ。尖刀を公窩よさ〳〵向く。只一刻

林沖
雪中ニ
寃を
報ふ

ヨ刺し殺す。士敦より血の流き出るを。まをさし入れ。その心肝を掴み出し。只ひとれい差撥あるに死るゞとよろめき〳〵走んとすれば。林冲ゆ〳〵趙到り〳〵。只一刀ヨ首を刎陸謙富安が首をもうこさおとし。二箇の死髪を結びあいせ〳〵ちづるヨ尖刀を捕り〳〵。廟の裏ある笠を把うちうぶり。葫蘆の酒を喫ま〳〵。ふたゝび鎗を含まくつ。東を投り走り〳〵。二五里ヨ到らぬ〳〵。近村の人。ゞ〳〵水桶鈎子を含ま火を放んとて来れるゆさあるふり。林冲を〳〵前ヨ〳〵。汝ま〳〵ゆさ〳〵故應ま〳〵。官ヨ報んといひうけ〳〵。ま〳〵〳〵路をいそぎ〳〵。雪の降るゆそ〳〵めよ〳〵。林冲ハ東を投り〳〵走るヨ両箇更次ホ〳〵。身も冷ま脚冰り〳〵。艱難いふべくもあらぬ。そこの時草料場を離る事。ゆ遍ありるゞ只一ツ疎林ふるさ処ヨ数間の草屋あり〳〵。四壁ヨる雪ヨ〳〵ぢれるヨ壁の

縫裏より火の光透出るれば。林冲ゆ〳〵走りゆさ〳〵。門を推開さて裏面をうかゝヨ中間ヨ一箇老る庄家火ヨ向ひあり。又四五箇の小庄家。その周囲ヨ世ゑ地爐の裏ヨ柴折くべ〳〵焙り地あり。林冲ハ笠子をとり〳〵前ヨ向ひ。小人ハ牢城ある。管營使の人ある。雪ヨ衣裳を濕されば〳〵。寒いも堪ぬ。あられとの火を借り〳〵。もぞ〳〵烘せ〳〵びてんゆと。いへハ庄家ども点頭て。汝ぞ〳〵烘んヨ。ゆの〳〵かるべきぞ〳〵と饒せ。ふ林冲ハ地爐のそばヨ世より〳〵。濕る衣裳を烘るふ。火炭の邊ヨ一箇尾児を煨著るゞ。酒の香りれ〳〵。鼻孔ヨとゞり〳〵。極ヨ彼庄家ある對〳〵いふ。小人懷中ヨ些の碎銀子あり。ゞ〳〵ふとの酒を回り〳〵。喫せるゞ〳〵いふ。老る庄家これを受〳〵頭をうち掉。我們ハ毎夜輪流て采囲を看ヨ於るヨ今既ヨ四更の天氣ホ〳〵。ん〳〵寒〳〵。この酒ハ

我們が喫よさ人あるを足らざ。おるをいられをしといふ。林冲さこいるをう。宣ふことろとりるれど。只二三碗をまけ与くる。小人あも些のさむさを温させるくるといらせもあくど。彼庄家眼を睜ことろもひめて主好意をりる。汝よ衣裳沈烘ふまれば還酒を喫んといふ。汝ゆうべそく立去れり去ども串在るさど。と異口同音ふ罵きば。林冲忽地大よ怒て。厠側とるべ道理をおらど。いでるひちふせんといさまさる。彼老る庄家をのけさまよ搶倒し。鎗桿をつさいれる。火爐の裏を攪まらせばその火四下よ飛散りる。彼庄家の鬚鬢よ燒焦こと何とせんと叫ぶよど。衆人一斎よ跳り起り。林冲を打んとするを林冲ハ鎗桿をりる。乱打よ打ちふせば。ゆ一拄も拄得ど。ゆ一へもちふど逃出る。林冲ハさもとそと打笑ひつ。土坑上よ両箇の椰瓢あるをんる。一箇を把りて。

巻の酒をとふける。残りるく喫をり。鎗を提る門を走り出ること。一歩ハるる一歩ハ低く。浪く蹌くと脚を把住るど。一里の路ゆるとて。一朔風よ一掉され山洞辺よ撲地と倒れる凡醉るる人一ふび倒るるさハ終よ起れるるるど只醉伏るる雪の裏よあり浩然よ彼莊家ど〻ハ別よ二十人あまりを驅催し鎗を拖棒を拽草屋の下よゆくるるるるる林冲をえどいまど遠くハあるど〻踪跡を尋ぬつ赶將来り。只えれば林冲ハ雪の裏ふ醉倒れ鎗を捨るその傷ふあり〻ハ衆人一發と走りるる一條の索をりるいる縛め腕を肥脚を把りる雪を踏ることさ挑りるゆく。時ハ五更のころあるる畢竟林冲縛られるいかなる話とと次人かゆく。そハ次の巻のエ。

をまちるるん。

文化乙丑年夏五月下浣始起艸同年秋
閏八月上浣絶筆於初編十卷之尾餘卷
必當不久而續譯焉　曲亭主人識

水滸畫傳二編近日嗣出

譯者　曲亭馬琴

畫工　葛飾北齋

版元　酒井茶輔

國字飜譯水滸画傳　十回以下晁蓋呉用公孫勝楊志阮小兄弟劉唐宋洪が傳ふる至るまゝ来冬出板仕ゆ

○この書ハ飜譯中のりんとゝ精細なるうしろめたくゝ而菴羅貫が文體なるゆゑ後ハ華本の水滸傳を解もるとゝハおのゝゝ自得もゝことおわかるべし

魁蕾標注　園雪　園部頼徹と薄雪姫の奇縁とつまびらかふまらしゝ　前編五冊来春出版　後編五冊来冬出版

繪本東嬢錦　全五冊

昔男井筒卷　全五冊

繪本壁落穂　小枝藝著

袈裟御前貞操記　東京傳作前編三冊　葛飾北齋画後編二冊

○曲亭主人著述目録

真間手姑名所遊歌　近刻披露九八部編梓の書肆一ミあり

金澤文庫碑　女郎花　頼風傳　水滸金石縁　頼豪阿闍梨怪鼠傳

袈裟御前七帖法語　婆ノ姫心ノ鬼　百合維栄枯物語　宋素卿異国録　漢和撫子草紙　雲絶間請雨紀聞

文化四丁卯年春正月吉日

大坂書林　心齋橋轉勞町　勝尾屋六兵衛

江戸書林　今川橋白銀町　前川弥兵衛

神田平川町二丁目　角丸屋甚助

和漢西洋書籍賣捌處

群玉堂河内屋　岡田茂兵衛　大阪心齋橋博勞町角

仝支店　田中市丸